

# 日置の伝説 ⑥

## 七不思議 “馬神様”



川原地区に孟宗竹に覆われた杜がある。これを馬神様と云う。地元でも殆ど語られていないがここには次のような伝説がある。坂本にある利生山永福寺は長徳三年眞言密教寺院として創建。隆盛時は山麓に六坊、末山に五十三ヶ寺を擁していた。その頃、本坊の阿闍梨(和尚)様は大變般若湯(酒)が好きであったが佛に仕える身のこと、人前で般若湯を呑むわけにはいかない。そこで密かに般若湯を造り嗜んでいた。寺には多くの修行の小僧がいたが和尚から大事な葉だから近づいたり、

さわってはならぬと固く禁じられていた。或る日、和尚が檀家の法要に出かけた留守のこと、寺で飼っている馬の様子がおかしいのを一人の小僧が発見して大騒ぎとなった。馬は病氣らしいのだがどうすることも出来ない。小僧達が右往左往しているうちに和尚の大事な葉壺(酒壺)を見つけた。さて、この葉を馬に飲ませてよいものか小僧達は思案していたが突然一人の小僧が頓狂な声をあげた。「こんなおいしい葉を馬に飲ますのはもったいない」とちびりちびり飲んでいるではないか。他の小僧もびつくりしたが「そんなおいしい葉なら私も」とついに全員が般若湯の入った壺の周りに集まり飲み始めた。和尚は留守のことだし、般若湯を前にして小僧達はいい気分になったが、一人の心根のやさしい小僧は馬が可愛そうだと少しわけて飲ませてやった。馬はしばらくすると般若湯がきいてきたのか先程より気分がよくなったようだ。ところがそこへ突然和尚が帰って来たから、さあ大変！すばしい小僧が咄嗟の間に壺の般若湯を残らず馬に飲ませてしまい「馬が病気で苦しんでいましたので、和尚

様の大事な葉ですが全部馬に飲ませてしまいました」と云って和尚をごまかしてしまった。小僧達は和尚から大した咎めも受けずに済んでほっとしていた。ところが、馬屋では一度に沢山の般若湯を飲まれた馬が大暴れし始め、手のつけようがなくなった。馬はついに馬屋から飛出し、山を駆け下り広い日置の野山を走り出した。どんどん走り回った馬は馬返しと呼ばれる所まで来ると急に向きをかえ掛淵川めがけて走り出した。般若湯を飲んで走った為喉が渴いたのだろう。だが川端近くまで来た馬は急に力なく倒れ息絶えてしまった。里の人達はその馬を不憫に思いねんごろに葬り祀ったと云う。現在、馬神様の杜には祠と天保三年建立の鳥居がある。然し、これは須賀社(須佐男之命)を祭る祠と考えられる。また庚申塚が二基あって合祀されているのである。毎年、秋の収穫を終えて北風の吹く頃になると神主を招き小祭が催される。五穀豊穣の感謝の祭である。新南陽市に馬神と云う所がある。その由来は榎田と称する田の中に、馬頭によく似た石があり、或る夜その馬頭石が鳴いていたので、村人

達は馬神の杜を設けて祈禱をしたと伝えられている。昔はいや時代を遡る程、人間と動物はお互いに切り離せない交渉の相手であったと考えられる。動物は人間以上に予知能力を備えていると考えられていたし、神または神に近い存在の動物もいたのではないかと思われる。例えば小さいものから牛馬のような大きい動物に至るまで、ときには畏きもの、冥界からの使者になったり、或いは人の暮らしに喜びを与える対象として共存して来たのである。人々の生業によって、この世に生きる多くの動物が立場を替えて神格化されたものを随所で見ることが出来る。

